

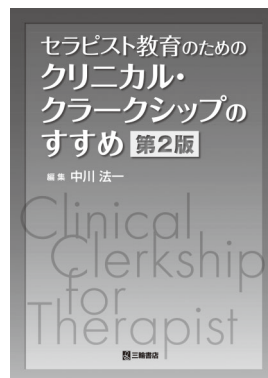
□ 書評 □

中川法一(編集)

セラピスト教育のための クリニカル・クラークシップのすすめ(第2版)

評者 内山 靖

(名古屋大学大学院医学系研究科理学療法学講座)



この度、2007年5月30日の初版から6年の歳月をかけて第2版が刊行されました。

教育の重要性を否定する者はおらず、さまざまな苦悩や熱意が語られている一方で、いざ研修会を行うと参加者が集まらずに困るという話も耳にします。中でも臨床実習という統制しがたい多要因に加えて、自由度の高い教育環境では、裁量、臨機応変、ケースバイケースなど、耳ざわりのよい言葉が先行して、明確な指針と方法論の提示がなされてきませんでした。その結果、若い臨床実習指導者は、自身が受けた経験だけを頼りに学生を指導することになり、学生時代のこんな理不尽な思いだけは後輩にさせたくないと思っていたはずが、周囲からみれば“倍返し”の状態に陥っている状況もまれではありません。

第2版では全9章と付録の321頁で構成され、初版の1.7倍以上の分量になっています。第1章から第4章までのタイトルは変わらず、基礎・基本は普遍的であることを示すとともに、新しい臨床研修モデルとしてのメンター制や on the job training (OJT)、学生が一定の条件下で許容される基本的行為について加筆されています。第5章は、「従来型臨床実習からの脱却」として新設された内容で、「脱・〇〇」として、担当制、学生評価、レポートならびにデیلیーノートの改善について示しています。第6章は、「クリニカル・クラークシップの妥当性」について記述されています。

第7章は、本書のハイライトとも言える「クリニカル・クラークシップの実際」で、研究会等の活動を含めた実践の成果が生き生きと描かれ、まさに教育が求めるリアリティを余すところなく表現しています。第8章は「スタイル論の強化」として補強しています。

なお、筆者らの熱い思いが強いあまり、本法の正当性がやや強調され過ぎている印象を受けます。批判的な者を批判する姿勢は真の成熟に結びつきにくい要因にもなります。また、全体をガイドする総論部分を設けて、ある程度読み飛ばせるような工夫があるとさらによいかも知れません。付録のチェック・リストは極めて有用ですが、それを統合する臨床推論を意識した指導方法論の記載がやや少ないように感じます。

最後に、重要な問題でありながら、正面から取り上げられてこなかった臨床教育に関する書籍を出版し、改版を続けている筆者らと出版社には心から敬意を表します。教えることは自らが学ぶ最も効果的な手段であることを認識し、多くの臨床家や教育者に加えて、学生自身が早い時期からこのような書籍に親しむことを期待しています。

●B5版、330頁、1色刷

定価 4,410 円(本体 4,200 円+税)

三輪書店刊 2013